

## 特別支援教育の授業づくりと授業分析 (4)

～「主体的な学び」と「集団」「教師」の関わりを再考する～

企画者	新井英靖 (茨城大学教育学部) 吉田茂孝 (大阪教育大学教育学部) 湯浅恭正 (中部大学現代教育学部) 小川英彦 (愛知教育大学教育学部) 高橋浩平 (東京都杉並区立杉並第四小学校)
司会者	吉田茂孝 (大阪教育大学教育学部)・新井英靖 (茨城大学教育学部)
話題提供者	櫻井貴大 (岡崎女子短期大学)・小川英彦 (愛知教育大学教育学部) 成田 孝 (前鹿児島国際大学)

KEY WORDS: 質的研究 集団 教師の指導性 主体性

### 【企画趣旨】

本企画は授業を質的に分析しながら、授業を深化・発展させる方法を検討することを目的としたものである。2016年までの自主シンポでは、「状況の中で学ぶ」「体験が経験となる過程」「内面を育てる」というテーマを設定し、授業を分析してきた。こうした検討のなかで、特別支援教育の実践を質的に検討すると、「集団論」や「主体性」が鍵概念となることが見えてきた。そこで、今回は、以下の2人の報告をもとに「主体的な学び」において集団や教師はどのように関与しているのかという点を検討し、特別支援教育における授業づくりの原理を再考したいと考えた。

### 【話題提供者の趣旨】

#### 1. 多様な価値観を認められる集団作り

櫻井貴大 (岡崎女子短期大学)・小川英彦 (愛知教育大学)

#### 【3歳児クラスのYちゃん】

広汎性発達障害と診断された娘のYちゃん。知的な遅れはなく、保育所が初めての集団生活の場となった。入園当初から午睡時に走り回るなどの多動行動が見られ、友だちとの関わりは少なかった。

#### 【4歳児クラスのYちゃん】

加配保育士と担任の2人体制で26人のクラスを受け持つことになった。一年間保育所で過ごしたが、遊びの幅は依然として狭く、ブロックで遊ぶか、室内を走って過ごしていた。前担任から、音楽関係のことは興味があると聞いたので、担任がブロックで作った楽器を演奏していると、Yちゃんは興味を示した。担任のギター演奏が気に入ったようで「もう一回」と繰り返しやりとりを楽しむことができた。部屋の環境もYちゃんが走っても怪我をしないようにしたり、「Yちゃんは電車ごっこをしているんだね」と意味づけをしたりした。そうすることで、担任が注意することが減り、友だちも「約束が守れないYちゃん」というイメージから「なりきって遊ぶYちゃん」という認識の変化を図った。また、注意のし方に関しても、相手に「うるさいよ」ではなく『『2』の声でお話しようね』という伝え方の工夫をYちゃんに対してだけではなく、クラス全体で実践してきた。

秋ごろから、Yちゃんが興味を持って参加するようになった。「アイドルごっこ」の中でYちゃんが順番を守らないためトラブルになってしまう。「順番を守って遊ぶことができなければ、アイドルごっこはできないよ」と伝えると「こんな遊びつまらないからもうやらない」と言って遊びから抜けてしまった。「約束が守れるかなって思ったらまた

戻っておいでね」と声をかけ、様子を見守るようにした。友だちに誘われ戻ってきて、しゅしゅ違う役をしながら順番を待つことになった。アイドルごっこの中で順番を待っていれば、自分の番が回ってくるということを何度も経験する中で、少しずつ見通しが持てるようになり、順番を待ちながらも楽しんで参加できるようになった。

アイドルごっこが発展していき、お屋さんも出てくるようになった。Yちゃんがおたまをワイヤレスマイクとして使っていると、他児が「使い方が違うよ」と注意をして、言い合いになってしまった。その際に「Yちゃんはマイクとして使っているんだよね」「○○ちゃんは使い方が違うから注意してくれたんだよね」とお互いの言い分を受け止めながら、どちらが正しいという判断はしないように意識をした。他児には「じゃあ、危ない使い方をしていたら教えてあげてね」と伝え、「使い方が違う」＝「悪い」という認識を持たないように図った。このように、保育者の一つひとつの言動が、子どもたちにとって、価値観の判断基準を作ってしまうことを意識しながら、それぞれの意見を受け止めた上で、「じゃあ、どうしたら良いのかな」と投げかけ、一緒に考えるようにしてきた。そうする中で、それぞれが違っていることが当たり前という「文化」を作ることによって、Yちゃんもみんなから受け入れられ、楽しく過ごすことができたのだと感じる。(注：事例は、プライバシー保護のため、重要部分を脚色し、架空のケースにして記載した)

#### 2. 「主体的な学び」を育むための具体的な条件を考える

成田 孝 (前鹿児島国際大学)

「主体性」が多く学校の研究テーマに設定されるのは、それだけ「主体的な学び」に大きな課題を抱えている“あかし”である。教師には、「主体的な学び」を創造するための教授学的な根拠が求められる。そこで、子どもたちがかけがえのない「豊かな生活」を送るために、以下の4つの視点から、その根拠を具体的に考えてみたい。

- ①「何をどう教えるか」の前に、子どもの視点からの「豊かな生活」とは？
- ②主体的活動(「する活動」)と非主体的活動(「やらされる活動」)の特質は？
- ③主体的な学びを育むための土台である「教師の姿勢」、主体的な学びを育むための「題材の条件」とは？
- ④「主体的な学び」を育むための「段階的支援」とは？

(ARAI Hideyasu, YOSHIDA Shigetaka, YUASA Takamasa, OGAWA Hidehiko, TAKAHASHI Kouhei, SAKURAI Takahiro, NARITA Takashi)